

# 外国人と人権に関する研究

## —人権学習「韓国・朝鮮との出会い」の授業における一提案—

宿毛市立咸陽小学校 教諭 北川 幸代  
高知県心の教育センター 指導主事 角 雅子

県内の小学校における人権教育年間計画を見た時、多くの小学校は、ALT との交流や他国の理解にとどまり、国内に住む在日外国人の生活や思い、願いを理解し、多様性を受容する中で多文化共生をめざす視点が少なかった。

本研究では、日本と深いつながりがあり、多くの人々が日本に住んでいる韓国・朝鮮をテーマとして提案授業を行った。提案授業では、遊びや自分たちの地域の文化、生活とのつながりについて、児童が考える学習や当事者との出会いを設定した参加体験型による授業を行った。そして、人権教育がめざす、違いを認め共通性を大切にするという児童の意識変容について考察した。

キーワード：外国人と人権 異文化理解 韓国・朝鮮 民族学級 つながり

### 1 はじめに

近年の国際化の進展とともに、全国的に外国人登録者の数は増加している。それに伴い、異文化との共存や多様性の尊重が言われるようになった。

稲垣(2003)が、「自己理解や自己肯定感をはぐくみアイデンティティを保持・伸長することが、国際理解に対する児童の重要な教育的課題である」<sup>(1)</sup>と述べている。また、宋(2008)は、「生きていくことの素晴らしさや自他の生命の尊さを理解し、民族的・文化的背景の異なる人々が排除されることなく豊かなアイデンティティを形成し、互いに尊重する態度を身につける」<sup>(2)</sup>ことの必要性について述べている。これらのことは、外国につながる児童及び日本の児童両者にとって、自他に対する受容、理解という人権教育の考え方につながっていくものと考えられる。しかし、「平成19年度小中学校人権教育主任研修会」で各校から提出された、「人権教育実践概要」に見られる「外国人と人権」という人権課題に対する取組では、他国の文化などについて学ぶことが中心であり、日本人の児童が自分の地域の歴史や文化の素晴らしさに気づき、自己理解や自己肯定感を高めることを基底においた、自分も他者も大切にするという取組の弱さも感じられた。

本研究では、人権教育がめざす、違いを認め共通性を大切にすることをめざす観点からの授業に取り組んだ。田淵(1991)は、「人権と国際理解教育」において、「隣国理解と在日韓国・朝鮮人理解教育こそ国際理解教育であり人権教育である」とし、差別や偏見の克服として、「等身大の隣国文化を伝える」<sup>(3)</sup>ことの大切さを述べている。

検証授業においては、韓国・朝鮮の伝統的な遊びや生活に触れ、授業対象となる小学校4年生児童の日ごろの遊びや生活と関連付けながら、文化の類似性やつながりに気付かせることをねらいとした。授業の取組により、児童が自分の地域の文化を見つめ、異なる文化を持つ人々を尊重しようとする態度をはぐくみたいと考えた。また、多くの在日韓国・朝鮮人が生活をしている大阪のコリアンタウンや民族学級の存在を知ることによって、日本にある「外国人と人権」について考えるきっかけとなる授業を提案し、授業を通して児童の変容について考察していくこととした。

### 2 研究目的

児童が韓国・朝鮮に興味や関心、共感することで共生をめざし、課題を見付けることでその解決に向けて、行動していこうという心情の育成をめざす授業を提案する。「外国人と人権」という人権課題の学習を通して、自他に対する受容、理解につながる人権教育の在り方を検証していく。

### 3 研究内容

- (1) 高知県内の外国人問題の学習状況の現状分析と課題の焦点化をするための取組
  - ア 高知県内の人権教育年間計画における外国人問題の学習状況の分析
  - イ 高知県国際交流協会及び高知市教育研究所、高知市教育委員会人権教育課への聞き取り
- (2) 「韓国・朝鮮」理解を進めるための教材収集及び教材作成のための取材
  - ア 大阪市立長橋小学校の「民族学級」授業参観及び民族講師からの聞き取り
  - イ 大阪市生野区「コリアンタウン」の取材
  - ウ 高知県と韓国・朝鮮半島とのつながりについての調査
  - エ 朝鮮半島理解のための現地取材と情報収集（「国立民族博物館」取材、ハンダ絵本の収集等）
- (3) A小学校において検証授業を実施
  - ア 対象児童  
A小学校 第4学年（23名）
  - イ 実施内容
    - (ア) 単元名 「韓国・朝鮮との出会い」  
授業は、道徳及び各教科、地域との横断的な取組がなされるような計画を考えた。（図1）

（平成20年度 在籍校 教育計画を参考に作成）

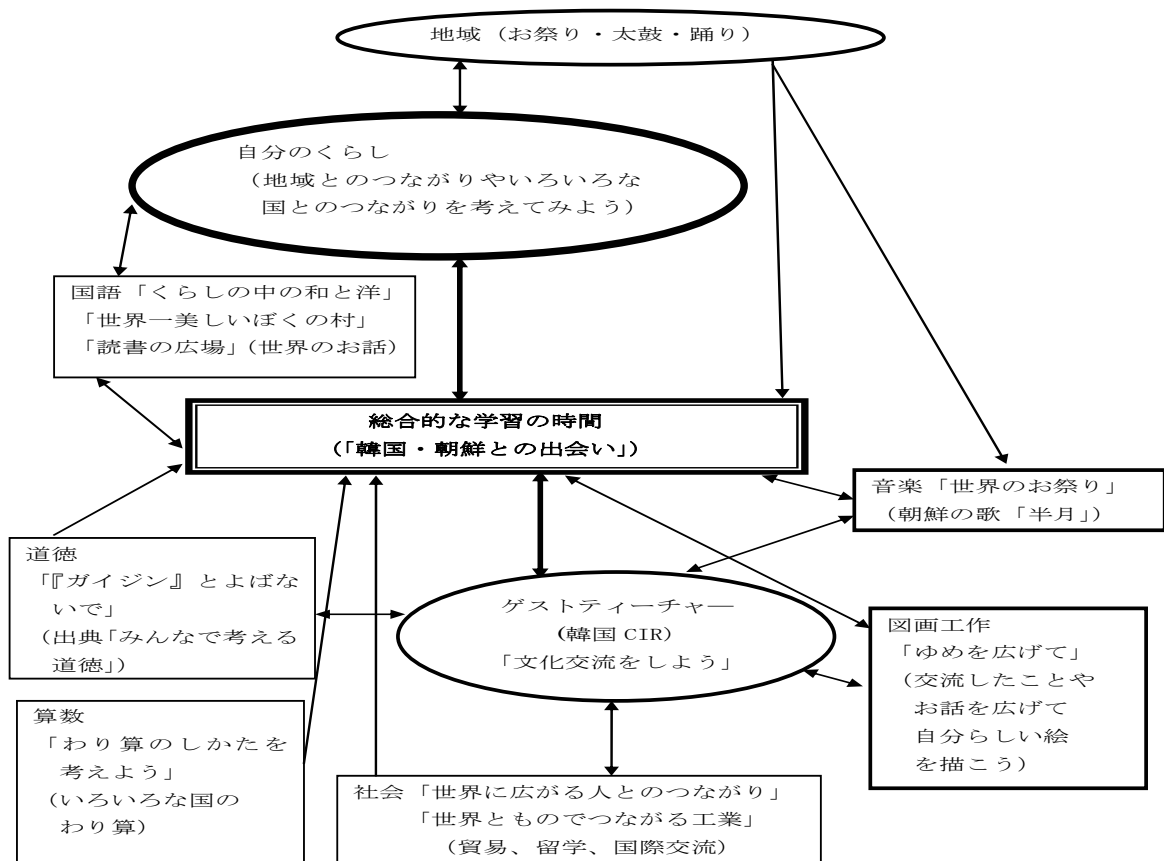


図1 道徳及び各教科、地域との関連

#### (イ) 単元目標

- a 韓国・朝鮮の文化や日本の文化に興味や関心を持ち、体験することができる。

- b 韓国・朝鮮の文化と日本の文化の類似性や違いについて知り、多様性を感じることができる。
  - c 自国、自社会の文化について、自分の言葉や活動で伝えることができる。
  - d 活動の中で気付いたことや考えたことを、友だちに分かりやすく伝えることができる。
  - e 学習を通して共通点や相違点について考えることができる。
- (ウ) 指導と評価の計画（全5時間）

表1 「韓国・朝鮮との出会い」指導と評価計画

| 時間<br>次 | 時 | 学習内容                    | 主な学習活動                                | 評価 |   |   |   |            |                          |
|---------|---|-------------------------|---------------------------------------|----|---|---|---|------------|--------------------------|
|         |   |                         |                                       | 関  | 考 | 表 | 知 | 評価規準       | 評価方法                     |
| 1       | 1 | 韓国・朝鮮ってどんな国             | DVDを見たり、クイズをしたりして韓国・朝鮮に興味関心を持つ。       | ◎  |   |   | ○ | (a)<br>(b) | 観察<br>ワークシート<br>振り返りシート  |
| 2       | 1 | 韓国・朝鮮の文化を体験しよう          | 韓国のCIRと交流し、韓国・朝鮮の文化に触れ、自分たちの文化の紹介をする。 | ○  |   | ◎ |   | (a)<br>(b) | 観察<br>ワークシート<br>振り返りシート  |
|         | 2 | 韓国・朝鮮の遊びを体験しよう          | 韓国のCIRと交流し、朝鮮半島の遊びを体験する。              | ◎  |   |   | ○ | (a)<br>(b) |                          |
| 3       | 1 | 韓国・朝鮮と日本のつながりについて考えてみよう | 日本と似ていることや違っていることを手掛かりにつながり考える。       |    | ◎ |   | ○ | (a)<br>(b) | 観察、<br>ワークシート<br>振り返りシート |
| 4       | 1 | 自分とのつながりを考えてみよう         | 自分の生活とつなげながら考える。                      |    | ◎ | ○ |   | (a)<br>(b) | 観察<br>ワークシート<br>振り返りシート  |

(エ) 第1次 第1時 「韓国・朝鮮に親しもう」

a 本時の目標

- (a) 日本との共通点や違いについて考えながら、韓国・朝鮮に興味関心を持つことができる。
- (b) 韓国・朝鮮とのつながりについて理解することができる。

b 本時の評価規準

- (a) 韓国・朝鮮の文化に興味関心を持ってDVDを見て、話を聴こうとしている。(関心・意欲・態度)
- (b) クイズをペアで考えることを通して、韓国・朝鮮とのつながりについての知識を広げることができる。(知識・理解)

c 活動の様子

導入の地図による国の位置の確認の後、韓国・朝鮮がかつては1つの国であったことを説明し、現在も言語や容姿、伝統的な文化などは共通している民族であることを伝えた。この授業では、1つの国のイメージで学習することが多くなることを確認して授業に入った。田内千鶴子さんにかかわる問題では、田内千鶴子さんの功績に対する感嘆の声が聞かれ、柏島で亡くなった朝鮮人朴二東氏にかかわる問題は、隣接の町に慰霊碑があり身近な出来事と感じ取っている様子が見られた。

創作のDVD「ソウルの街」の視聴では、「日本と似いちょう（似ている）」「テレビで見た」などのつぶやきが聞かれ、「伝統芸能」の視聴では、「(綱渡り) 韓国・朝鮮の人は、すごい」「(チャンゴの演奏) 太鼓より音が高い」などの発言が聞かれた。「独立公園」は、言葉を発する児童はなく、静かに集中して視聴していた。

韓国のお菓子の試食は、「味が似ているけど、辛い」「おいしい」などの感想が出された。また、チマチョゴリの着用体験では、「うれしい」「かわいい」「似合う」などの声が聞かれた。

班の話合いの中では、「伝統芸能の扇子踊りは、みんなが合わせてやっていて心に残りました」「学習する前は、暗い国だと思っていたけど、学習するととても楽しい国だと思いました」などの感想があった。「もっと知りたい韓国・朝鮮」のワークシートには、「どんな食べ物があるか知りたい」「昔のことをもっと知りたい」「韓国・朝鮮のお祭りについて知りたい」な

ど、授業で得た知識を更に深めたいといった内容が多かった。

(オ) 第2次 第1時 「韓国・朝鮮の文化を体験しよう」

a 本時の目標

- (a) 自分につながる文化を自分の言葉や活動を通して紹介することができる。
- (b) 自分の知りたいことを進んで知ろうとしている。

b 本時の評価規準

- (a) 自分につながる文化を相手に分かるように、自分の言葉で伝えようとしている。(表現・技能)
- (b) 韓国・朝鮮についてもっと知りたいと思ったことについて質問しようとしている。(関心・意欲・態度)

c 活動の様子

韓国の CIR (国際交流員) をゲストティーチャー(以後 GT と記載する)に迎え、参加体験を中心にした授業展開であった。華やかなチマチョゴリを着た GT との初めての出会いに、「すごい」「きれい」などのつぶやきが聞かれた。

音楽の授業で学習した朝鮮半島の「半月」を全員がハングルで歌い、GT から、朝鮮半島の童謡「トケビ マンナロ」の指導を受け、笑いのある和やかな導入となった。

GT への質問は、前時に学んだことを深めるような「韓国・朝鮮が一つだった時の国の名前を教えてください」というものや、自文化を調べる中で関心が高まったと考えられる「日本のお祭りのようなものが韓国にはありますか」などが出された。GT にそれらの質問に答えてもらったことで、「韓国の文化が分かったのでうれしかった」「これからも韓国のことを調べたいと思いました」など、興味関心の深まりが感じられる記述が見られた。

続いて事前に班でまとめていた自文化についての紹介を各班の代表が発表した。班別に「日本の生活」、「地域のお祭り」、「地域の食べ物」、「日本の文化」、「自分たちの遊び」、「家の行事や自分たち学校の行事」について GT に伝えた。更に、地域の方が作成した、児童参加による地域の祭りの DVD の視聴や、児童が演奏した地域の祭りのお囃子と GT の演奏するチャンゴとのコラボレーションを行った。日本の文化に興味関心を持っている GT からは、「日本のことやみんなのことがよく分かりました。私も日本の文化について勉強したいです」とのコメントが返された。児童からは、「韓国と日本が仲良くなれたと思います」などの感想が発表された。

(カ) 第2次 第2時 「韓国・朝鮮の文化や遊びを体験しよう」

a 本時の目標

- (a) 自分たちの地域の遊びと比べながら、韓国・朝鮮の遊びを楽しみ、体験することができる。
- (b) ハングル絵本の楽しさを味わい、既読の日本のお話との相違点に気付く。

b 本時の評価規準

- (a) 韓国・朝鮮の遊びを通して遊びを楽しもうとしている。(関心・意欲・態度)
- (b) ハングル絵本から、日本のお話との相違点に気付くことができる。(知識・理解)

c 活動の様子

初めに、児童の安全を考慮した遊びのルールや、時間設定などを記載したシートを配付し説明を行った。説明を聞いた児童は、友だちと相談しながら自分で決めた遊びの教室へと入って行った。授業者が担当した「チェギ」(羽けり)や「ペンイ」(こま)を使っの遊びには男子児童が多く参加し、「これむずかしい」「どうやってやるが」「ぼくら 13 回も続いた」などのつぶやきが聞かれた。GT は、「ムングーハー」(「だるまさんが転んだ」に類似の遊び)

の遊びの担当になり参加児童が集中した。GTと手をつなぎ楽しそうではあったが、指示や注意が聞けなくなるような場面も見られた。その際、学校長が児童に声をかけ、安全を保つことができた。「カウイ、パウイ、ポ、じゃんけん」は、担任に担当してもらった。この遊びは、教室に入ってすぐできる遊びであったため、途中参加が増え活発になった。「ぼくは、4回勝った」「先生にも勝ったよ」などうれしそうに感想を伝えてくれる児童が多かった。

最後に、ハングル絵本「うんこ餅」をGTがハングルで読み、続いて授業者が日本語訳の読み聞かせを行った。児童からは、「お餅を歳の数だけ食べるころは、日本の節分で歳の数だけお豆を食べるところと似ています」という発表があった。

(キ) 第3次 第1時 「韓国・朝鮮と日本のつながりについて考えてみよう」

a 本時の目標

- (a) 日本と韓国・朝鮮の違いについて考えることができる。
- (b) 日本にあるコリアンタウンの存在を知り、民族学級の民族講師の願いを理解することができる。

b 本時の評価規準

- (a) 写真を見て、韓国・朝鮮と日本の今と昔のつながりのちがいについて考えることができる。(思考・判断)
- (b) 日本にあるコリアンタウンの存在や民族学級の講師の役割について理解することができる。(知識・理解)

c 活動の様子

写真1～5を「日本」「韓国・朝鮮」「どちらか分からない」に班で話し合いながら分けた。



写真1 法隆寺 写真2 キョンボックン 写真3 コリアンタウン 写真4 A小学校 写真5 民族学級

児童が、「これは韓国、日本の人が来たときのために日本語で書いている」「これは、自分たちの名前が書いちょうけん、日本」「建物の色が日本とは違う」など、多様な意見を出し合っ

て話し合いを進めていく様子が見られた。コリアンタウンの写真は全員が「韓国・朝鮮」と判断していたが、授業者の既習事項と関連付けての説明に対して、児童も既習事項をもとに「大阪は韓国に近いので、韓国の人が多いと思います」など、気付いたことを述べていた。

同様に大阪市立長橋小学校の民族学級の写真も、ほとんどの児童が「韓国・朝鮮」と判断していたため、民族学級が日本の中にあることに驚きの声があがった。民族講師が当該校の卒業生であることを知り、これまでの葛藤や現在の願いについて班で話し合った。その中で、「仲間の支えが力になった」「自分らしく生きたい」等の発表がなされた。

感想には、「日本の屋根と韓国の屋根は似ていることが分かった」「韓国にも漢字があり、日本にも韓国のまちがあることを初めて知りました」といった日本とのつながりや日本にある韓国・朝鮮への「気付き」に関する記述が見られた。「児童が、自分のたちの民族的アイデンティティを大切にしたい学校生活を送ってほしい」という民族講師の願いについては、「先生は、日本の子どもに韓国と仲良くなってもらいたいのだと思います」「先生は、みんなに韓国・朝鮮のことを知ってもらいたいのだと思います」といった記述が見られた。

(ク) 第4次 第1時 「韓国・朝鮮と自分とのつながりを考えてみよう」

a 本時の目標

- (a) 韓国・朝鮮についての学習を振り返り、作成したクイズを分かりやすく表現することができる。
- (b) 韓国・朝鮮と自分とのつながりについて考えることができる。

b 本時の評価規準

- (a) 韓国・朝鮮について学習したことを友達に分かりやすく表現することができる。(表現・技能)
- (b) 既習事項を振り返り、韓国・朝鮮との自分たちとのつながりについて考えことができる。(思考・判断)

c 活動の様子

既習事項をもとに自分たちがクイズを考え、発表していくという活動であった。児童から、「本で調べてもいいですか」「見つけ勉強ノートから問題を作ってもいいですか」と要望があり、探究的な態度が見られた。児童が作ったクイズは、「パゴダ公園は日本語で何公園と言いますか」「韓国の太鼓の名前はなんと言いますか」といった既習事項から作ったものが多かった。「福岡からソウルまでの距離は何 Km ですか」「韓国と日本の学校の時間割は似ているでしょうか」といった、日本とのかかわりや自分たちの学校生活との共通点や違いについて、自分で調べたことをもとにしてクイズを作っていた児童も見られた。

本時は、児童主体の活動が中心であったが、話し合い活動がまともならず混乱が見られた班があった。

最後のイメージマップの作成では、既習事項や自主学習からの正しい知識理解による記述や「きれい」「楽しい」「なかよし」などの肯定的な記述内容が多く見られた。

ウ 学習プログラムの結果と考察

(ア) 授業の振り返りから

a 自己評価の変化

第1次第1時は、風邪のため児童1名が欠席したため22名で集計を行っている。

図2を見ると、「今日の学習は楽しくできましたか」の問いかけに対して第1次第1時の授業は、全員が「とても楽しかった」と回答していた。第3次第1時も全員が「とても楽しかった」と回答している。第4次第1時では「とても楽しかった」は、20名に留まった。

図3を見ると、「先生や友だちの意見や考え聞くことができましたか」の問いかけに対して、学習が進むにつれて「よくできた」と回答する児童が多くなり、「全くできなかった」と回答した児童はいなかった。

次ページの図4を見ると、「自分の思いや考えをはっきり伝えることができましたか」という問いかけに対して、第1次第1時及び第2次第1時、第2時は、「よくできた」と回答した児童は半数に満たなかったが、第3次第1時及び第4次第1時の授業

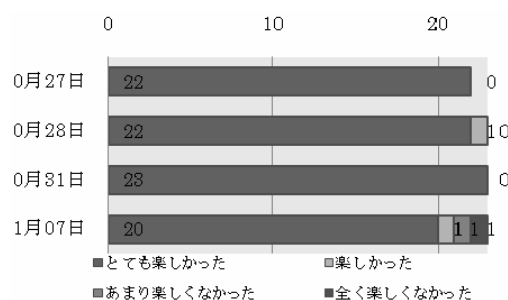


図2 「今日の学習は楽しくできましたか」

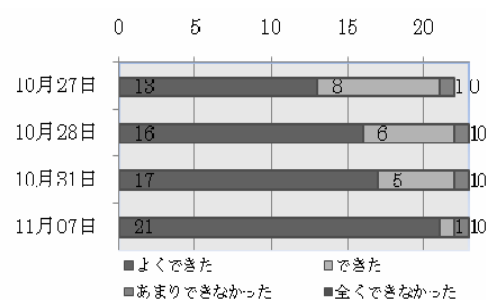


図3 「先生や友達の意見や考えを聞くことができましたか」

では、「よくできた」と回答した児童がクラスの過半数を超えている。

図5、6、7は各授業の目標に合わせた調査についてまとめたものである。

図5を見ると、「韓国・朝鮮について興味や関心を持って学習することができましたか」の問いかけに対して、「よくできました」が最も多く、「できた」を合わせて全員が回答している。

感想にも「もっと知りたい」といった記述が多く見られた。

図6を見ると、GTを招いての体験学習は、「よくできた」が最も多く、「あまりできなかった」「できなかった」と回答した児童はいない。図7を見ると、「日本と韓国・朝鮮とのつながりを考えることができましたか」という問いに対し、ほとんどの児童が「よくできた」と回答している。

「あまりできなかった」と回答した1名の児童も授業の中では、つながりについて考えた発表がなされており、他の児童からは、肯定的な評価が聞かれた。

図8を見ると、「自分と韓国・朝鮮とのつながりについて考えて話し合うことができましたか」の問いかけに対して、「よくできた」「できた」を合わせると、22名であった。

しかし、「あまりできなかった」と回答した児童が1名いる。

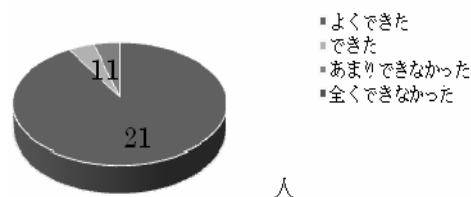


図7 10月31日「日本と韓国・朝鮮とのつながりを考えることができましたか」

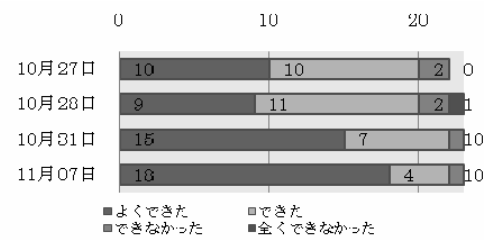


図4 「自分の思いや考えをはっきり伝えることができましたか」

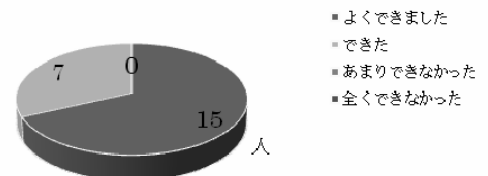


図5 10月27日「韓国・朝鮮についてきょうみ関心を持って学習することができましたか」

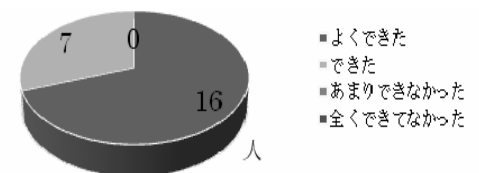


図6 10月28日「きょうみ関心を持って体験学習ができましたか」

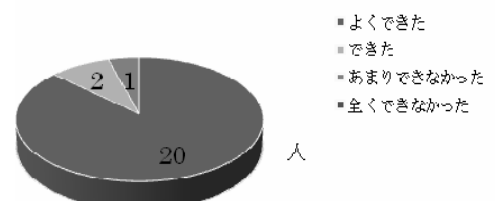


図8 11月7日「自分と韓国・朝鮮とのつながりについて考えて話し合うことができましたか」

## b 考察

提示した学習内容が、児童にとって楽しいと感じられる内容であったと思われる。

学習態度については、自己評価が高くなっているだけではなく、授業が進むにつれて私語や手遊びなどが減り、授業者や友だちの意見を聞く態度が良くなっている。

振り返りシートの記述にも変化が見られ、当初は、「○○ちゃんがよく手をあげていた」という行動のみに着目した記述が多かったが、「Sちゃんをよく考えて発表していた」、「M君は、自分の意見が言えていた」など、友だちの発言や内容の具体的に触れた記述が多くなった。また、

発表のときにも、友だちの意見とのかかわりや補足などの発言が聞かれた。

授業を通しての児童の変容は、「自分の思いや考えを伝える」という点である。発表に際して、ペア活動や班活動を多く取り入れたことで、活発な話し合い活動の様子が見られた。自己評価が高くなっていったのは、「友だちの意見を参考にしてもよいこと」、「助言を求めてもよいこと」に加え、「意見をまとめなくてもよい」という指示により、それぞれが、自分なりの意見を持ち発表するという意欲につながったのではないかと推察される。また、各授業の目標については、課題を明示していたことが児童の意識付けとなり、自己評価が高くなったのではないと思われる。

この授業には、通常は支援学級で学習していることが多いK君も、常に担任が寄り添い参加した。担任によると、十分な知識理解に結び付かない場面が見受けられたが、視覚教材を多数活用したことや参加体験型による授業展開にしたことで、楽しく授業に参加できていたのではないかと報告があった。また、気分が不安定な場面が見られることもあったが、学級児童の励ましにより、積極的に挙手をするなど、最後まで共に学習に参加することができた。事前のイメージマップは、無記入であったが、事後は既習事項である、「カウイ、パウイ、ポ、じゃんけん」をイラスト付きで書くなど、体験したことが具体的に表現できていた。

#### (4) ゲストティーチャーを迎えての授業についての考察

中村ら(2006)の「総合的学習におけるいわゆるゲストティーチャーの役割と課題(2)」を参考に学習活動を充実させたGTの条件を以下の3点にまとめた(4)。

- ・ 事前の打ち合わせの中で、GTが、授業者の考えた授業の意図を十分に理解し、児童のための自分の役割を把握していた。
- ・ GTが、韓国・朝鮮のことを理解してほしいという気持ちを持ちながら、それを教え込もうという姿勢ではなく、共に勉強したいという共感的な態度であった。
- ・ 授業者との連絡を密にしていたため、そこに信頼関係が生まれ、学級の実態が把握できていた。児童にも、事前にGTの人柄や一緒に学習する期待感を伝えていたため、GTへの親近感をはぐくむことができた。

28日の学習活動について、図9を見るとハングル絵本「うんこ餅」の読み聞かせが最も人気が高い。韓国の推薦図書であり、朝鮮半島の伝統的な文化に触れることができる作品であった。ハングル絵本の読み聞かせについては、大阪市立長橋小学校の参観授業の中でも効果を実感していたので、その効果をA小学校の4年生児童においても確認することができた。

図10を見ると、どの遊びも人気が高いが、特にGT参加の「ムングハー」は、常に児童の参加が多かった。遊びについては、自己決定による参加としたので、「あの遊びが面白い」など、児童間の情報交換の場が見られた。また、児童自身が、日本の遊びとの共通点を見出したため、抵抗感が少なく、「似ているけど、少し違う」と言いながら楽しんでいた。振り返りシートには、「韓国のじゃんけんがおもしろかった」「チェギをM君たちと協力しながらできた」など、友だちとのかかわりが感じられる記述や『ムングハーピョッスムニダ』は日本の『だるまさんがころんだ』にいてい

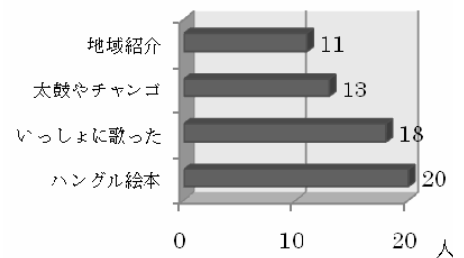


図9 10月28日の文化交流  
(複数回答)

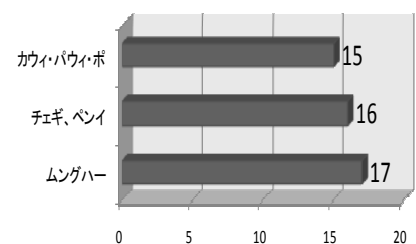


図10 10月28日の楽しかった遊び  
(複数回答)



る」など、自分たちの遊びとの共通点に気付いた記述も見られた。

遊びの体験は、中学年の異文化の理解として有効な手法であることが考察される。しかし、授業者が遊び体験の全てにかかわることができず、児童の実態をつかむことが十分できなかったことや、机やイスを廊下に出すなど安全面の配慮に欠けていたため、注意が多くなった遊び場所があったことは、今後改善すべき点である。

#### (ウ) 児童の記述からの考察

学級担任及び支援学級担任への聞き取り、事前事後のイメージマップ、振り返りシートの記述内容、発展の学習において自己変容が大きかったと思われる児童について取り上げる。振り返りシートの記述内容は、「認知」「情緒」「意欲」「感想」「その他」の5つのカテゴリーに分類した。分類にあたっては、「広辞苑 第六版」(2008)の記述に基づき、「認知」を「事象について知ること、ないし知識を持つこと」、「情緒」を「折に触れて起こるさまざまな感情」、「意欲」を「積極的に何かをしようと思う気持ち」<sup>(5)</sup>とした。また、所感や所見を「感想」とし、これらに分類できないものを「その他」とした。分類方法は、授業者、高知県心の教育センター指導主事、高知県心の教育センター研究生の3名でカテゴリー別の分類を行った。分類は、2者以上の同意があるものは、それぞれのカテゴリーに分け、それ以外は「その他」と分類した。なお、児童の文章は、児童の特性を生かすため、表現については原文のまま記載する。

##### a 児童A

表2を見ると、児童の事前のイメージマップは肯定的な記述と否定的な記述が混在している。事後のイメージマップは、学習や体験により習得した知識や感想へと変化し、肯定的な記述や親近感を持ったと思われる記述が見られる。

表3を見ると、「楽しかった」という情緒のカテゴリーがどの授業でも記述されている。学習を進めるうちに「かんこくちょうせんと日本の建物がにている」など、授業の内容にかかわる認知が感じられる記述が見られるようになった。

また、「もっと知りたい」「お父さんやお母さんに教えてあげたい」という行動化への意欲が感じられる記述が見られた。行動化は、実際に韓国・朝鮮について調べたことを自主学习ノートにまとめるという形に現れている。Aさんへの聞き取りによると「興味が出て、言葉や歴史、食べ物について調べた。自分でも調べることができてうれしかった」「お父さんお母さんに、韓国・朝鮮の食べ物のことや行事のことを教えてあげると、『韓国・朝鮮の人はすごいね』と言っていた。調べたこともほめてもらったので、また調べて教えてあげたいと思った」と、意欲の継続が感じられた。

表2 児童Aの事前、事後のイメージマップの変化

| 事前のイメージマップ(10月17日)  | 事後のイメージマップ(11月7日)   |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・せまい・キムチ・暑い・めん類が多い</li> <li>・村がいっぱい・自然ゆたか・みんな仲良し</li> <li>・日本と仲良し・色とりどり</li> <li>・みんなが同じような服を着る</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ペナレ・美人・おいしい・からい・きれいな町</li> <li>・かんこくちょうせんは赤色がいっぱい・言葉がむずかしい</li> <li>・日本とにている・遊びが楽しい</li> <li>・キムチ・楽しかった・とうもろこし茶・ファンユギャ先生</li> <li>・かんこくちょうせんは日本と仲良くなった</li> <li>・かんこくちょうせんに行ってみたくなった</li> <li>・むずかしい</li> <li>・もっと仲良くなりた</li> </ul> |

表3 児童Aの振り返りシートの分類

| 授業日    | カテゴリー | 記述内容                                   |
|--------|-------|--|
| 10月27日 | 情緒    | 楽しかった                                  |
|        | 感想    | かんこくちょうせんのことについてちょっとくわしくなった            |
|        | 感想    | きょうみを持った                               |
|        | 認知    | 日本とのちがいが少しわかった                         |
|        | その他   | 手遊びをしたりとなりの人とむだ話をしたので気をつけます            |
|        | 意欲    | もっと勉強したいです                             |
| 10月28日 | 情緒    | 楽しかった                                  |
|        | 感想    | かんこくごもちょっと分かってきました                     |
|        | 情緒    | 合奏も楽しかったです                             |
|        | 意欲    | 私はかんこくに行つてかんこくごを覚えたり、かんこくのとくちょうを知りたいです |
|        | 感想    | かんこくと日本が仲良くなつたらいいな                     |
|        | その他   | かんこくのおばけを見てみたいです                       |
|        | その他   | また、ナレ先生と勉強したいです                        |
| 10月31日 | 認知    | かんこくちょうせんと日本の建物がにている                   |
|        | 感想    | ファンユジャ先生は、みんなにかんこくちょうせんのことを伝えたいと思っている  |
|        | 感想    | 日本の人と仲良くなりた                            |
| 11月7日  | 情緒    | 一週間とても楽しかった                            |
|        | 情緒    | とても楽しい勉強でした                            |
|        | その他   | むずかしいところもあつたけどがんばれました                  |
|        | 意欲    | お父さんお母さんにもかんこくちょうせんのことを教えてあげたい         |
|        | 情緒    | ペナレさんにかんこくのことを教えてもらつて楽しかった             |
|        | その他   | また来てほしい                                |

Aさんは、どの授業でも積極的に挙手し、発表していたが、発表の声が小さく自信がないようにも見受けられた。振り返りシートの自己評価では、各項目「よくできた」との回答であったが、「自分の意見や考えを伝えることができましたか」という項目は、「できた」という回答に変化はなかった。聞き取りの中で、「以前に発表した後、笑われたことがあつたが、この授業を通して、みんなが一つになった感じがあり、真剣に聴いてくれる雰囲気ができたので、発表に対する不安がなくなった。でも、まだ自分の中では、言いたいことの全部は言えてはいない」ということであつた。しかし、担任は、「この授業を通してAさんは、他の教科での発表にも積極的になつたように思われる」という感想を述べていた。

b 児童B

表4を見ると、事前と事後でイメージマップの記述内容量には、あまり変化は見られない。しかし、事後は学習の中で学んだ事項や体験した記述内容へと変化している。

表4 児童Bの事前、事後のイメージマップの変化

| 事前のイメージマップ (10月17日)   | 事後のイメージマップ (11月7日)   |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・国の名前がむずかしい・ペヨンジュン</li> <li>・こわい感じがする</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・キムチ・オデン・お茶・おかし・カウィパウィポじゃんけん</li> </ul> |

また、次ページの表5を見ると、学習後の情緒的な記述が多い。素直な記述で、授業が肯定的に受け入れられているように見受けられる。また、日本と韓国・朝鮮の類似性に対する認知が記述されている。B君は、保護者が外国につながっている児童である。11月7日には、「また授業がしたいです」という行動化につながる記述が見られる。授業者の「次は、B君が発表してみてもどうですか」という声かけや担任、友だちの励ましにより、発展の授業の中で、B君自身が自主発表として取り組むことが実現した。

表5 児童Bの振り返りシートの分類

| 授業日    | カテゴリー | 記述内容                            |
|--------|-------|---------------------------------|
| 10月27日 | その他   | 今日の学習はDVDやクイズがあった               |
|        | その他   | クイズは、後1問で全部できたのに1つだけ間違えた。くやしいです |
|        | 認知    | DVDは食べ物、(伝統)芸、広場に公園を見せてもらいました   |
|        | 情緒    | 公園は戦争のことでかなしかったです               |
|        | 情緒    | でもその後は楽しかったです                   |
| 10月28日 | 情緒    | チャンゴがすてきでした                     |
|        | 情緒    | 今日は楽しかったです                      |
|        | 情緒    | いっぱいかんこくごを知れたことがうれしかったです        |
|        | 情緒    | 絵本のおばけの顔がうんちでびっくりしました           |
|        | 意欲    | こんな体験をもう一度したいとおもいます             |
| 10月31日 | 感想    | また来てほしいです                       |
|        | 感想    | 神社の屋根のところが似ていた                  |
| 11月7日  | 認知    | かんこくの遊びが似ていたかもしれない              |
|        | 感想    | かんこくちょうせんのがよくわかりました             |
|        | 意欲    | また授業がしたいです                      |

(エ)

の事前・事後における韓国・朝鮮に対する親近感意識変容からの考察

児童の韓国・朝鮮に対するイメージについて事前・事後に3件法により調査したものを、統計処理を行った。(SPSS 12.0J for Windows を用いて t 検定を行った)

a 親近感に対する意識

表6は、事前の調査では「暗い」と感じている児童が多く、「似ていない」「おもしろくない」など、否定的なイメージが強かったことが示唆される。しかしながら、事後では、「近さ」に関しては、第一次の授業で地図により韓国・朝鮮を確認し、クイズによって航空機での渡航時間を知ったことで、近いと感じるようになった児童が増えた。

また、写真やDVD、GTとの出会いが、日本との類似性の気付きにつながったのではないかとと思われる。

「明るい」というイメージは、ソウルの街の様子やGTの華やかなチマチョゴリ、明るい人柄に負うところが大きかったのではないかとと思われる。

また、遊びの体験やクイズ、ハンゲル絵本などの楽しさが、「おもしろい」という心情への変容につながったのではないかと考えられる。

表6 検証授業の事前・事後における韓国・朝鮮に対する親近感意識の変容 (調査項目別平均点比較)

| 質問項目                       | 事前・平均値<br>(標準偏差) | 事後・平均値<br>(標準偏差) | t 値   | 有意確率  | 判定 |
|----------------------------|------------------|------------------|-------|-------|----|
| ①近い・どちらとも言えない・遠い           | 2.35(0.94)       | 2.87(0.46)       | -2.96 | 0.007 | ** |
| ②明るい・どちらとも言えない・暗い          | 1.61(0.84)       | 2.87(0.34)       | -6.27 | 0.000 | ** |
| ③好き・どちらとも言えない              | 1.65(0.71)       | 2.74(0.54)       | -5.79 | 0.000 | ** |
| ④似ている・どちらとも言えない            | 1.65(0.89)       | 2.83(0.49)       | -5.72 | 0.000 | ** |
| ⑤行ってみたい・どちらとも言えない・行ってみたくない | 1.74(0.86)       | 2.70(0.63)       | -4.94 | 0.000 | ** |
| ⑥おもしろい・どちらとも言えない・おもしろくない   | 1.48(0.67)       | 2.91(0.29)       | -9.45 | 0.000 | ** |
| ⑦知りたい・どちらとも言えない            | 2.30(0.82)       | 2.87(0.34)       | -3.44 | 0.002 | ** |
| ⑧気になる・どちらとも言えない            | 2.09(0.90)       | 2.78(0.52)       | -3.43 | 0.002 | ** |
| ⑨関心がある・どちらとも言えない・関心がない     | 1.78(0.80)       | 2.87(0.34)       | -6.58 | 0.000 | ** |

\*\*p<0.001

b 興味関心に対する意識（項目No.⑤、⑦、⑧、⑨）

事前調査で、「知りたい」と思っている児童は12人と少なくなく、韓国・朝鮮に対する興味の低さがうかがわれた。一方、「関心がある」と答えた児童は、5人であった。授業後に児童の興味関心が高まったのは、調べ学習用の本のコーナーを設置したことやGTに質問する機会を与えるなど興味関心が持てる情報の提供が要因として考えられる。「行ってみたい」と言う心情は、GTに対する憧れや、学習で学び取った日本との類似性や違いを自分で確かめてみたいという心情変化が振り返りの自由記述に見られた。

4 検証授業の成果と課題

(1) 成果

- ・ 多様な教材づくり
- ・ 韓国・朝鮮に対する児童の意識変容に対するきっかけづくり
- ・ 学習の発展

4年生で、初めて行う韓国・朝鮮理解の授業ということで、視聴覚教材や遊びの体験などを多く取り入れ、楽しみながら理解につながる授業ができたことが振り返りシートや授業中の発言から考察できる成果だと考える。児童にとって、初めての出会いとなった大阪市のコリアンタウンの存在は、日本の中にある異文化との共生の事例として受け入れられたのではないかと思えた。授業参観や聞き取りに協力してもらった大阪市立長橋小学校の民族講師は、小学校時代は民族学級で学び本名で過ごすことが当然であったという。仲間と離れた中学校時代は、葛藤の末、通称名（日本語の名前）で過ごしたとのことであった。しかし、高校時代は、担任の励ましと級友の韓国・朝鮮の文化に対する肯定的な評価に自信を得て、再び本名で学校生活を送ったとのことであった。児童が、グループ学習の中で、民族講師の思いに寄り添い考えたことも日本の中にある「外国人と人権」について考えるきっかけになったのではないかと思った。

事前の韓国・朝鮮に対する親近感意識やイメージマップに見られる授業前の韓国・朝鮮に対する多くの否定的なイメージは、共に学習したいと願う当事者との出会いなどにより、授業後は明るく発展的な方向への期待が感じられる記述へと変容し、授業がそのきっかけづくりになっていることが推察される。

授業の発展としては、「何人かの児童が行った自主学習がきっかけとなり、『もっと調べたい』との要求があり、調べ学習の時間を持った」と担任より報告があった。また、3年生の担任からの「3年生にも学習を広げてほしい」との申し入れにより、4年生児童による学習発表が、11月17日に持たれた。発表内容は、ハンゲルの歌及び「カウイ、パウイ、ポじゃんけん」、児童の作ったクイズの発表であった。

B君の発表については、授業後、担任に「自分にも、もう一つの名前がある」ことを告げ、担任から肯定的な評価を受けたことが発展の授業につながった一つの要因ではないかと思われる。

「韓国・朝鮮との出会い」が、A校に在籍する外国につながる児童への理解のきっかけになったのではないかと感じられた。

5年生の新聞委員会から、4年生と授業者に取材の申し入れがあり、その記事は、2008年11月23日付けの高知新聞の子ども記者か

|                             |
|-----------------------------|
| 台わんのこと (B)                  |
| ☆ぼくの名前を台わん語で言うよ○○です。        |
| ・先生がカッコイイ名前と言ってくれてうれしかったです。 |
| ・ぼくもこの名前が大好きです。             |
| ☆ぼくのお母さんの名前は○○です            |
| ☆台わんの言葉のクイズです               |
| ・デンシャ（まって）ということですよ。         |
| 電車ではありません                   |
| ・シイシニー（ありがどうございます）          |
| ☆台わんのおいしい食べ物、飲み物            |
| ・ギョウザ、とうふをつぶしてみたいなジュース      |
| ☆日本とのちがいが                   |
| ・家のドアが鉄になっている。              |
| ・台わんの中学校は朝、昼必ずそうじをしていた。     |

資料 児童Bの自主発表資料

らの投稿として掲載された。

更に、3学期に実施される校内学習発表会（保護者及び地域の方の参観）において、4年生は検証授業を発展させた学習発表を行った。内容は、既習の韓国・朝鮮の歌や児童がグループ別で調べたアジア理解につながるものであった。

## (2) 課題

- ・ 学習時間の確保
- ・ 年間を通しての計画
- ・ 自文化の探究

授業の取組により、児童の興味関心は高まった。しかし、学習活動が多岐にわたり、それぞれの活動の時間配分が適切ではなかった。特に、GT への質問時間などが不十分であり、児童一人一人の疑問に対して十分に答えられなかったことが課題であった。学習が進むにつれ、班の話し合いの力が伸び、自主的に課題に向える児童が多くなっていったが、課題設定が十分に検討された内容でない場合には、話し合いがまとまらず、「知りたい」「自分もやりたい」という意欲を減少させた児童がいたようである。個別支援を求める児童にも対応できる時間設定や資料提供があれば、さらなる興味関心を継続させることにつながったのではないかと思われた。

また、この授業のもう一つのねらいである自文化の良さを見付ける学習活動や発表についての取組の弱さが見られた。自文化の探究やまとめ、発表形態について、担任との話し合いが不十分であったことが反省点である。担任は、常に協力的であったが、多忙な時期に学習時間を増加させるには、無理があった。年間を見通して計画を立て、自文化についても自分たちで十分に調べ、まとめ、発表する場を設定すれば、自分につながる地域の文化や行事から得られる自尊感情のはぐくみが期待できたのではないかと考える。

## (3) 学習の方向性

多文化との共生をめざす、「外国人と人権」を課題とした人権教育への取組は、田淵(1991)が、「低学年における人間的共感が、高学年になって意味を持てきます」<sup>(5)</sup>と述べているように、発達段階に応じたカリキュラムを組むことによって、自他に対する理解や受容につながるのではないかと考える。低学年、中学年での異文化理解による他国（他者）への受容感や共感が培われているならば、他国（他者）を尊重し、共に進んでいく道を探ろうという姿勢が期待される。

日本人児童及び外国につながる児童のアイデンティティは、相互の尊重された関係性の中ではぐくむことができる。自己の文化や歴史を見直し、さまざまな民族の文化や歴史の学びにより、違いや多様性を認め合う学級、学校をめざすことができるであろう。

以上のことから、本研究で行った学習を高学年につなげるために、次ページ表7のような学習プランを今後の方向性として、提案したい。小学校においては、前段階での学びを必要に応じてフィードバックしつつ新たな学習へとつなげる中で、児童の学びをより確かなものすることをめざしている。提案している教科や領域以外でも発展させることができる単元や学習内容があると考えられるが、それらについては次年度に学校現場において考えていきたい。

また、教科や領域以外の場面でも児童の学びを広げることも可能であると考えられる。本研究で留意したことは、学習と学習の間をつなぐために、児童の目に触れるところに学習につながる「もの」を置き、興味関心を持たせるよう心掛けたことである。学習の中に、韓国・朝鮮につながる「もの」を提示したり、「もの」を置いたりすることで、学習を深め、韓国・朝鮮への親近感をはぐくむことができるものとする。

表7 教科・領域他における外国人と人権の発展的学習

| 学年   | 社会               | 人権学習の視点   |
|------|------------------|---|
| 第5学年 | 地域と国土の学習         | <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本と韓国・朝鮮の共通性と違いについて、第4学年での学びを振り返りながら確認する。</li> <li>・産業や文化面でのつながりについて、具体物や写真などを活用して距離的な近さだけでなく、日常生活における近さを感じることができるようにする。</li> </ul>   |
| 第6学年 | 歴史分野<br>(古代から現代) | <ul style="list-style-type: none"> <li>・古代から中世における日本と韓国・朝鮮の文化的なつながりや、経済的なつながりについて理解させ、その中で日本の今の文化が存在することについて、第4学年での学習をフィールドバックしながら進めることで、歴史的つながりを理解できるようにする。</li> <li>・近世における対立と友好の歴史から、対立を解消するために必要なことは何か、互いに尊重し合うために必要なことは何かについて理解できるようにする。</li> <li>・近代国家、列強への道のりの中で、韓国・朝鮮に対する抑圧の時代に日本人が持っていた意識について理解させるとともにそのような意識を自分は持っていないか、他の国の人々や友だちに対して持っていないかについて考えられるようにする。</li> </ul> |
|      | 公民的分野            | <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本国憲法下において、在日韓国・朝鮮人をはじめとする在日外国人に保障されていない権利について気付かせるとともに、人権侵害の具体について示すことで、共に幸せに生きるために、自分たちに何ができるについて考えられるようにする。</li> </ul>   |

| 学年     | 特別活動       | 人権学習の視点   |
|--------|------------|---|
| 第5・6学年 | 文化的行事      | <ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽発表会などの場において、韓国・朝鮮をはじめとする外国の民謡や童謡を歌ったり、演奏したりするとともに、その歌や曲の背景について考えることを通して、異文化への理解と共感を深めるようにする。</li> </ul>   |
|        | 遠足・集団宿泊的行事 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・遠足行事において、朝鮮人連行と地域の人々とのつながりを確認するフィールドワークを通して、日本と韓国・朝鮮の歴史における光と影から、日本人としての近隣諸国とどのようなかかわりを持つべきかについて考えられるようにする。</li> <li>・宿泊研修のレクリエーションの時間などに、日本だけでなく韓国・朝鮮他の国の遊びを取り入れ、遊びの中の共通性を確認することで韓国・朝鮮他の子どもたちに思いを馳せることができるようにする。</li> </ul> <p>(ここから総合的な学習の時間において、より詳しく調べたり、ゲストティーチャーに子どもの生活に聞くなどの活動を行ったりすることも考えられる)</p> |

| 学年     | 総合的な学習の時間        | 人権学習の視点   |
|--------|------------------|---|
| 第5・6学年 | ワールドフェスティバルを開こう！ | <ul style="list-style-type: none"> <li>・幡多地域に住む韓国・朝鮮籍の人々や、その他国の人々、地域の人々を学校に招き、食べ物や遊び、写真展示などを通して互いの理解を深められるようにする。</li> </ul> |

| 学年     | 道徳の時間   | 人権学習の視点  |
|--------|---|--|
| 第5・6学年 | 内容項目(8)<br>「外国の人々の文化を大切にする心を持ち、日本人としての自覚をもって世界の人々と親善に努める」 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・第4学年の学びをもとに、自国の文化だけではなく他国の文化への理解や、人々の思いを考えることを通して、それぞれの国の人々が自国の文化を大切にしていることをつかみ、他者の思いや願いを大切にしようとする態度をはぐくむ。その際、多様な視点から文化を見つめ、違いは豊かさにつながることや違いがあるからそれぞれの人々のアイデンティティが形成されることに気付くことができるようにする。</li> </ul> |

## 5 まとめ

今回の検証授業では、対象学年が4年生ではあったが韓国・朝鮮との初めての出会いということで、多様な学習内容を取り入れてみた。

「外国人と人権」という課題は、外国人だけの課題ではなく私たち自身の課題でもある。実態のないマイナスイメージが児童に及び、それ自体が児童の正当な他者理解を妨げていた。しかし、今回、「韓国・朝鮮との出会い」の授業に取り組み、等身大の韓国・朝鮮について学ぶ中で、児童に意識変容が見られた。児童に韓国・朝鮮の良さを発見させる教材として、伝統として大切に守られてきた芸能、遊び、衣装、食べ物について取材を行い、教材づくりをする過程で、筆者自身はその国の魅力を児童と共有したいという心情が強まった。

児童の変容を支えるには、教員の「外国人と人権」を課題とした国際理解への取組が不可欠ではないかと思われる。外国につながる児童が在籍している場合は、その児童や保護者を理解するための授業や校内研修を持つことが、身近な「外国人と人権」を考えるきっかけとなろう。また、外国につながる児童が在籍していない場合でも、教科との関連の中で外国についての理解を深め「外国人と人権」について、教職員で考えてみることも大切なのではないかと考えている。

今回の授業の発展の中で、B君が担任に「自分にも、もう一つの名前がある」ことを告げた。今後の学習や日常の生活の中で、教職員がB君の思いや願いを理解し、アイデンティティを大切にしていけるようななかかわりに留意する必要があると考えている。

この研究を進める中で、筆者には、多くの出会いがあった。その出会いにより授業に意欲的に取り組むことができたのではないかと考えている。快く取材に応じ協力してくださった関連機関及び人々との共同研究であったと紙面をもって謝辞を伝えたい。

### 【引用文献】

〈1〉 大阪市小学校国際理解教育研究会編

「国際理解教育と人権 互いの人権を尊重し、地球上の人々と共に生きる子どもを育てる」  
解放出版 2003

〈2〉 宋 英子

「多文化共生の教育に関する研究 (V)」 大阪市教育センター 『研究紀要第 181 号』 2008

〈3〉 田淵五十生

「人権と国際理解教育」 大阪市教育センター 『研究資料 17 同和教育の現状と課題』 1991

〈4〉 中村泰之、平野朝久

「総合的学習におけるいわゆるゲストティーチャーの役割と課題(2)」 東京学芸大学紀要出版委員会 『東京学芸大学紀要. 総合教育科学系 Vol. 58』 2007

〈5〉 新村 出編 「広辞苑 第六版」 岩波書店 2008

〈6〉 同前掲書 〈3〉